



# Japanese language management by Persian native speakers in honorific contact situations with Japanese native speakers: Case study based on third person's valuation



**Hourieh Akbari \***

(corresponding author)

Lecturer of Sociolinguistics in Shirayuri University and Researcher in Chiba University, Tokyo and Chiba, Japan

Email: hakbari@shirayuri.ac.jp



**Sohrab Azarparand\*\***

Assistant Professor of Japanese Language and Literature, Faculty of Foreign Languages & Literatures, University of Tehran, Tehran, Iran

Email: s.azarparand@ut.ac.ir

## ABSTRACT

This paper focuses on the Persian speaking community as a case study in Japan which is a community that has received little attention so far. In fact, there is no field work based on field work about The Persian speaking community in Japan so far. This study examines how Persian native speakers, manage their distinctive ritualistic acts and linguistic acts in honorific contact situations when communicating in Japanese with Japanese native speakers. The focus is placed on where and how frequently their Persian native norms are used for language generation and language management when they participate in Japanese conversation and in situations where the language is used. As far as methodology is concerned, five conversations in natural ritual situations which involved both Japanese and Persian native speakers were analyzed from a third person point of view. Deviations from Persian native norm, particularly sociolinguistics norms, were extracted for analysis. As a result, it was found that during a ritual situation, deviations from Persian norms tend to occur in specific positions. This finding suggests that different base norms are emphasized according to the function of speech acts in ritual situations. It is expected that the result of this survey will be useful to Persian native speakers for learning Japanese language.

DOI: 10.22059/JFLR.2021.324088.843

## ARTICLE INFO

Article history:

Received:

9th, Mey, 2021

Accepted:

18th, June, 2021

Available online:

Summer2021

## Keywords:

*Persian native speakers, honorific behavior, honorific contact situations, third person's valuation, sociolinguistics' structure*

\* Hourieh Akbari is a lecturer in social linguistics at the Faculty of Japanese Literature at Shirayuri University and researcher at the Faculty of Social and International Sciences, Chiba University, Japan. Her research interests are study of cultural backgrounds on the language of a society.

\*\* Sohrab Azarparand is an assistant professor of Japanese language and literature in the Faculty of Foreign Languages and Literatures, University of Tehran. His areas of interest are Japanese language teaching and language teaching from sociolinguistics point of view.



## 在日ペルシア語母語話者と日本語母語話者の儀礼的場面における相互行為

### ～第三者のインタビューから考察する（ケース・スタディー）～



**Hourieh Akbari \***

Lecturer of Sociolinguistics in Shirayuri University and Researcher in Chiba University, Tokyo and Chiba, Japan

Email: hakbari@shirayuri.ac.jp



**Sohrab Azarparand\*\***

Assistant Professor of Japanese Language and Literature, Faculty of Foreign Languages & Literatures, University of Tehran, Tehran, Iran

Email: s.azarparand@ut.ac.ir

#### 概要：

本研究においては、日本在住のペルシア語母語話者が日本語で日本語母語話者と会話をする際の彼らの言語的、非言語行動に注目をした。そこで、彼らが日本語で言語行動を起こす際、どこまで母国語の影響が表れているのかを、ケース・スタディーとして考察する。換言すれば、本研究において焦点を当てるのはペルシア語母語話者が日本語を話す際にどこまで自らの言語を調整できるのかを把握したい。本論では、従来の研究では見られなかった、儀礼的行動が産出されると予測された5つの場面に行き、そこでペルシア語母語話者の日本語の言語管理を第三者の視点を取り入れて考察した。研究の結果から、ペルシア語母語話者は日本語母語話者との儀礼的な場面において、母語の影響として考えられる社会言語的な言語行動を日本語でもしていることが見られた。本研究を通して、パターン化されたいくつかの言語行動が儀礼的な場面において繰り返されていることが分かる。これらの結果を踏まえ、今後のペルシア語母語話者の日本語教育にかける。

DOI: 10.22059/JFLR.2021.324088.843

© 2021 All rights reserved.

#### ARTICLE INFO

Article history:

Received:

9th, May, 2021

Accepted:

18th, June, 2021

Available online:

Summer 2021

#### Keywords:

ペルシア語母語話者、  
儀礼的行動、儀礼的な  
接触場面、第三者評価  
、社会言語学規範

\* Hourieh Akbari is a lecturer in social linguistics at the Faculty of Japanese Literature at Shirayuri University and researcher at the Faculty of Social and International Sciences, Chiba University, Japan. Her research interests are study of cultural backgrounds on the language of a society.

\*\* Sohrab Azarparand is an assistant professor of Japanese language and literature in the Faculty of Foreign Languages and Literatures, University of Tehran. His areas of interest are Japanese language teaching and language teaching from sociolinguistics point of view.

## 1. はじめに

今日の世界では、異なる文化・言語を背景とする人々が同一の社会で共に生活をする事が多くなっている。社会言語学においては、これらの社会集団が使用する言語の様相が様々な観点から議論されている。日本でも他の国からの移住者が増加するのに伴い、多種多様な言語状況が見られるようになってきている。このような状況で、日本語を母語としない市民が日本語による日常のコミュニケーションを行う際、多くの困難に直面しているように見受けられる。そのような困難を克服するため、個々の社会集団は自らの言語・文化を背景とした特有の言語戦略を使用している。従来の日本における接触場面に関する研究は、近隣の諸国（中国や韓国）が対象であった。しかし、グローバル化する社会においては、言語・文化背景がまったく異なる人々との相互行為が接触場面と呼ばれる環境の中でとわれ

てくる。特に地理的に離れている国の人々の間では、互いの見慣れない習慣や文化的背景の理解がより困難になると考えられるため、そうした研究に焦点を当てることの重要性も大きいと言える。

本研究では特に両社会の文化で重視される儀礼的場面を対象に考察を行った。

ペルシア語母語話者は、母語場面での相互行為で浸透している独特な儀礼的言語行動をもっている。この言語行動戦略は「タアーロフ」と呼ばれ、特に相手に対し敬意を示したい場合など、様々な場面で表れる。そこで、本研究ではケース・スタディーとして、接触場面においても、タアーロフ的な言語行動規範（母語規範）が表れるのかについて検討していきたい。そしてそこで、ペルシア語話者の母語規範として判断された箇所においては、どのような問題が報告されるのかを考察する。さらに、日本語規範（目標言

語規範)からの逸脱は、どこで留意され、第三者によってどう評価されているのかを検討する。

本調査では、接触場面におけるタアローフ的な言語行動規範(ペルシア語母語規範)を言語管理の視点から考察することで、儀礼的な自然会話に生じる問題は何か、その理由は何かを明らかにする。

ネウストプニー(1997)によると、言語管理理論とは、実際の接触場面の中での参加者が言語をどのように評価しているかを捉えるところから始めるべきであると述べている。「接触場面アプローチ」を言語コミュニティ(speech community)研究にも当てはめることができると考えられている。したがって、本研究の分析結果は、日本在住のペルシア語母語話者の言語コミュニティの実態の一部を明らかにすると考えられる。

## 2. 先行研究

### 2.1. ペルシア語母語話者のタアローフにおけるコミュニケーション行動

儀礼とは、一定の形式にのっとった規律ある行為・礼法のことである。Tambiah (1985, p.128)は、儀礼とは「文化的に体系化された象徴的コミュニケーション」(“a culturally constructed system of symbolic communication”)だと述べている。その際、特定の社会構造の中で生きる社会の構成員は、儀礼を通して社会的アイデンティティを確認、再確認する(Malinowski, 1922; Radcliffe, 1922)という。

ペルシア語母語話者のコミュニケーションにおいては、タアローフが不可欠な要素であると言えよう。タアローフには様々な意味・定義があるが、遠慮・礼儀・厚遇・謙遜などがその例である(Shahrgard, 2003)。タアローフに関して、特に近年にはイラン人研究者が数多くの研究をしている。これらの研究には、タアローフは一種の言語的・文化的・社会的な要素として、社会言語学・文化に関する研究・言語の社会学・文化と人間コミュニケーション(Bikaran & Azadarmaki, 2010; Tajabadi & aghagolzadeh, 2011; Sharifi Moghaddam & Bahreyni & Abolhasanizadeh, 2017)、対照言語学(Salmani-Nadoushan, 2004

； Mirzasoozani, 2018）、翻訳法に関する研究（Mirza-suzani, 2006； Alavi & Zeynali, 2014； Dahmardeh & Parsazadeh & Rezaie, 2016）など様々な観点から検討されている。タアーロフは、ペルシア語のコミュニケーションにおいて非常に重要な役割を果たしているため、イラン人研究者になされた研究の傍ら外国人にも重視されている（Zoren, 2016 など）。

アメリカの社会学者である Beeman(1986) は、タアーロフがイラン人の儀礼的ストラテジーであることを明らかにし、ペルシア語には互いに礼儀を示す根本的な思想としてふたつの原則があると主張している。

- (1) Self-Lowering：謙遜語や謙讓語のような行為を行う者を相対的に低め、その動作を受ける者（受け手）を高める。
- (2) Other-raising：相手を立て尊敬する行為であり、この二つの形はペルシア語の名詞や動詞にも影響し、変形を及ぼすと述べている。謙讓語名詞（呼称）、謙讓語動詞、尊敬語名詞、尊敬語動詞がそれぞれ儀礼的な場面で使われている。

## 2.2. 接触場面での言語管理

言語・文化背景が異なる人々による相互行為は、接触場面と呼ばれ、接触場面は母語話者同士の場面とは異なる独自の特徴を持っている（Neustupný 1985a）。そこで、接触場面研究では、言語管理理論のアプローチから接触場面での言語の生成と管理に注目し、社会文化、社会言語そして言語上の問題に対する言語管理の解明を課題にしている。従来の研究では、様々な手法を用いて接触場面で見られる問題を考察する研究が行われてきた（ファン、1999； 宮崎・マリオット共編、2003など）。また、接触場面での「言語問題」を言語管理のプロセスから解明する研究も数多く見られる（Fan, 1994； 村岡、2006； 高、2006など）。

言語管理の理論には、2つの特徴がある。まず一つ目はマイクロプロセスの重視である。ネウストプニー（1995）は、言語管理の理論は「言語計画」との関連で生まれたことであり、その理論からするとすべての言語問題の基礎は談話のマイクロプロセスにあるとしている。二つ目は、言語管理のプロセスには一定の普遍的な段階があることである

。

以上で述べた段階を以下のようにまとめる。

- (1) 規範 (Norm) からの逸脱 (Deviation)
- (2) 逸脱への留意 (Note)
- (3) 留意された逸脱の肯定的/否定的な評価 (Evaluation)
- (4) 評価された逸脱に対する調整 (Adjustment) 計画と実施

本調査では、言語管理プロセスの (1) ~ (3) の部分を中心に分析していく。

### 3. 研究方法

データはフィールドワーク (佐藤、1992) で調査者がペルシア語母語話者と日本語母語話者が相互行為を行っている場面に行き、自然な会話を収集したものである。調査機関として、一部の調査は、2019年8月から12月にかけて行われた。会話の収録方法は2通りで、1つは、調査者自身が実際にコミュニティーに入り、調査協力者とともに一定の時間を過ごし、そこで行われた会話を収集したものである

。もうひとつは、調査者は実際の場面におらず、会話を録音するためICレコーダーのみを調査協力者に渡し都合の聞くとときに会話を録音したものである。もちろん調査協力者には、事前に録音の許可をもらいその後もデータが研究で使用されるための許可を得た。

今回は、収集された52のスピーチイベントのうち、5つのスピーチイベントに焦点をあて分析を行った。本論では、会話当事者 (ペルシア語母語話者) の自然会話での言語管理に注目し、ペルシア語母語話者の日本での儀礼的な社会言語規範からの逸脱を取り上げる。

まず、調査者による自然場面での逸脱への留意を「逸脱の基準」として考察した。次に、同じ会話を第三者に聞いてもらい、会話内で逸脱だと留意した箇所を指摘してもらった。その箇所を「逸脱の基準」と照合させ、分析を行った。まず自然会話のデータ収集後、宇佐美(2011)のトランスクリプト(transcription)方式で文字化を行い、必要に応じてより信頼性を弧状させるため、調査協力者に対してフォローアップ・インタビュー(follow interview) (ファン2002)を実施し

た。

### 3.1. 録音されたスピーチイベント

ここでは、儀礼的相互行為が観察された場面のスピーチイベントを取り上げた。以下に分析対象となった5つのスピーチイベントと参加者の関係と人数をあげた。

表1. 分析対象の五つのスピーチイベント

### 3.2. 研究における調査協力者

6名の調査協力者はすべて、日本中・長期滞在者（7年～25年）のイラン出身のペルシア語母語話者である。調査協力者の日本への来日目的により、彼らの日本語習得に対する需要や意識が異なっていることが明らかになった。しかし、日本語能力に差があるものの、すべての調査協力者は、日本語の読み書きが可能であり、日常会話ができることが確認された。

表2. 分析対象の6名の調査協力者の特徴

第三者による逸脱の留意の分析では、4名の日本語母語話者と2名のペルシア語母語話者、合計6名の協力を得た。対象としたペルシア語話者は、日本語を十分理解し、相互行為での会話の流れや、目標言語からの逸脱を評価できる者を対象とした。

表3. 第三者日本語母語話者

表4. 第三者ペルシア語母語話者

## 4. 分析の枠組み

分析には、言語管理理論（Nustupny1994）の枠組みを用いた。それぞれのコミュニティーの参加者には、長年の年月を通

してその国の歴史と文化の中に定着した一定の言語規範を持っている。しかし、あるコミュニティーの参加者が新たなコミュニティーでインターアクションをする際には、「逸脱」を起さなければならない。

本稿では、儀礼的相互行為の分析をするために、Hymes (1972) の SPEAKING MODEL を応用したネウストプニー (1982) の分類、「社会言語規範」からの逸脱の留意に焦点を当てる。この分類では、コミュニケーションをいつ始めるか（点火のルール）、いつどこでコミュニケーションを行うか（セッティングのルール）、標準語で話すか方言で話すか、あるいは丁寧体を使うか普通体を使うか（バラエティーのルール）、どんな媒体を使ってコミュニケーションをするのか（媒体のルール）、そしてどのような内容のコミュニケーションをするのか（内容のルール）などがある。ここではネウストプニーの分類を基に、大きく5つの視点から、ペルシア語話者の接触場面での逸脱を考察する。これらは、儀礼的なインターアクションを成り立たせる上で会話の参加者が談話内で重要視しなければならないも

のである。一方で、ペルシア語母語話者が逸脱をしがちだと判断したもとなる。

以下に、5つの逸脱の詳細を紹介する。

(1) 話題関係での逸脱：発話者同士の談話内での話題の内容が逸脱として注目される。

(A) 非適切な箇所での話題導入：

ある話題や表現が談話内の不適切な箇所で現れた場合。あるいは、なんの前置きもなく新話題に入る場合。

(B) 多様な話題の導入（内容のルール）：

話題を多く導入することで話の内容にずれが生じる。

(2) 隣接ペア (Sacks, Schegloff & Jefferson) ・発話の連鎖からの逸脱：

(A) 未完成な隣接ペア：

第1成分が発話されるものの、相手の発話者により第2成分が完成しない。

(B) 非優先的な応答：

第1成分と第2成分の間に、間、笑



い、フィラー、などが留意され、会話全体のテンポが乱れていると判断された場合。ここでは、隣接ペアは完成するものの、不適切な応答から連鎖が継続しない。

(C) 発話連鎖の中断：期待される箇所において発話連鎖が続かない。

(3) 対人関係での逸脱：相互行為において、相手の発話者との関係性に関連する言語行動、社会的立場・社会的関係の認識に関わる逸脱により、言語調整に変化が表れる。

(A) 上下関係を留意しない会話進行：

相手の発話者との距離感を縮める言語調整を優先する。

(B) スピーチレベル(Speech level)での逸脱：

相手の発話者との社会関係を留意せず、普通体や敬体を使用する。

(4) 話順交替の逸脱の留意：

(A) 一人がターンを長く持ち続けることで、非儀礼的な態度として評価される。

(B) 話題開始に見られる逸脱

(5) その他：談話内のミクロな視点からのみではなく、マクロな視点からの逸脱が留意される場合。

(A) 相互行為での会話全体に対する印象（笑が多い、声の張り具合などそれぞれを行うことで失礼になることにつながる場合において）

(B) 非言語的な行動など（ハグ、拍手などのボディタッチ）

ペルシア語話者による逸脱が以上の項目または内容と関連するものであれば、談話内で社会言語規範からなんらかの逸脱が生じたものとみなす。

#### 4.1. 第三者による逸脱の認定と評価による規範の同定

第三者による逸脱の認定そしてその評価を述べてもらう手法は、調査者の客観的な逸脱に対する判断を補うために行われた。加えて、会話内での規範を同定するためのデータとして、第三者の評価を取り入れた。第三者は、逸脱を留意した際に、自己

の中で基底規範 (Neustupný 1985a) を持っており、そこから逸脱を判断していると考えられる。接触場面の参加者はその場面で適用される基底規範を新たに構築したり、内的場面ではおきかないような問題を解決しなければならなかったりと、様々な面で母語話者だけから構成される内的場面とは異なる言語行動をとっていかなければならない (Neustupný 1985b)。

## 5. 分析の結果

ここでは、第三者による逸脱への気づきと、調査者自身が、会話分析を通して「逸脱の判定基準」とした箇所を照合していきたい。まず第三者に、談話内において「気になった箇所」「分かりづらい、理解しにくい」と留意したところを指摘してもらった。そして、それぞれの逸脱を4節で示した調査者による逸脱判定の5つの基準に照合し、分類を行った。

逸脱を見ると大きく4つのタイプに分類することができる。

逸脱1：日本語話者のみによって留意された逸脱

逸脱2：ペルシア語話者のみによって留意された逸脱

逸脱3：日本語話者とペルシア語話者の両者によって留意された逸脱

逸脱4：逸脱の判定基準にはあるものの第三者には留意されていない逸脱

それぞれのグループで逸脱が留意された件数は以下のようなになる。

表5. タイプ別に見られた逸脱の種類と数

表5でわかるように、日本語母語話者のみに留意された逸脱は、ペルシア語話者によって留意された逸脱より2倍以上報告されている。ペルシア語母語話者があまり逸脱として判断しないものが存在することが理解できる

。また調査者による判定基準と第三者が留意した逸脱の大部分は一致することが明らかになった。次節では、第三者評価の2つのグループがどのような規範をもとに逸脱を留意していたかを分析する。

から逸脱を留意し、他方ではそれぞれ別の規範をもとに逸脱を留意していたと考えることができるだろう。

### 5.1. 第三者による逸脱の評価と規範

これまで逸脱がどの箇所で留意されたのかを分析を通して検討した。ここでは、日本語母語話者とペルシア語母語話者がそれぞれの逸脱をどのように評価したのか、またそれぞれが逸脱として判断した規範が何であったのかを見ていきたい。そして、第三者の逸脱の種類とその数を探る。表6では、以上で述べた項目がそれぞれ示されている。

表6. 第三者による逸脱への評価と適用された規範

ここで、日本語母語話者のみが留意した箇所に関しては、ペルシア語母語話者が母語の影響を受けやすいあるいは接触場面でよく逸脱をしがちであると考えられる箇所になる。なぜならば、相互行為の会話参加者と第三者として会話を評価したペルシア語母語話者がそれらの箇所に対し、儀礼的な逸脱として留意していなかったからである。

日本語の規範のみを知っている日本語母語話者は、日本語の規範からの逸脱を留意し、評価している。そして、両規範を知っているペルシア語話者は、日本語とペルシア語の両方の規範から逸脱の留意、また評価をしている。つまり、収集されたスピーチイベントに対して第三者の日本語母語話者、ペルシア語母語話者は、一方では共通の規範

5.1.1. 逸脱1の評価

日本語母語話者が留意した逸脱（逸脱1）での評価は、すべて否定的であった。表6から日本語母語話者が否定的に評価した箇所の項目が確認できる。以下の事例1では、日本語母語話者のみに否定的に評価された会話となる。

（例1）場面：研究室での会話、

参加者：学生（3名・ペルシア語話者も含む）と先輩（1名）

【逸脱の種類】：日本人の情報提供に対する不適切な応答（隣接ペア連鎖から）

【評価】：否定的                      【判断規範】：日本語規範

ライン番号(L)    協力者                      会話内容

69 N-IR06                      【間】皆さん、どこか行かれるんですか？。

70 N-JP013                      【少し間】私は、実家に帰って、家族と一緒にいます。

71 N-IR06                      おーう、すごい、実家一番だよね<笑>。

72 N-IR06                      実家帰りたいね。

73 N-JP01                      帰らないの？。

74 N-IR06                      本当、短いから、お正月の休みは、外国は行けないね。

第三者評価の日本語母語話者が最も否定的に評価していたのは、「①日本人の情報提供に対する不適切な応答」であった。例1では、N-IR06が会話で少しの間が見られた時に、話題提供を開始している。質問に対して、N-JP01が応答したものの、L71でペルシア語話者が、『おーう、すごい、実家一番だよね<笑>。』と返答する。そこでは、隣接ペアが成り立っているものの、日本語母語話者からは、否定的に評価されている。「どうして、家族旅行が『すごい』となるのか」、「日本人は、『いいね』などと答える」、「大変なことをしているわけではない」というコメントが見られた。従ってN-IR06は、ペルシア語の規範から、応答では、「相手に興味を表示する」または「感情を会話の中で示す」ための発話をするものの、このような応答は

日本語母語話者には肯定的に評価されないようである。

【評価】：肯定的 【判断規範】：ペルシア語規範

### 5.1.2. 逸脱2の評価

#### (1) 肯定的評価

ペルシア語母語話者のみによって逸脱（逸脱2）が留意され、なおかつ肯定的に評価されたものは、対人関係の「③年上である日本人の名前にペルシア語の接尾辞を使用」またその他の「①談話の流れをペルシア語規範で促進」、「②ペルシア語母語話者による感情提示が談話で留意され、聞いていて気持ちがいい」、「③ペルシア語話者が日本人の会話のテンポにあわせている」であった。コメントの内容から、肯定的に評価されたものは、ペルシア語の儀礼に関する規範が評価の基底規範になっていることが分かる。

(例2) 場面：近所での挨拶、参加者：日本語話者60代、ペルシア語話者40代（近所の知り合い）

【逸脱の種類】：談話の流れをペルシア語規範で促進している

103 N-JP02 あら、そう、良かったね。

104 N-JP02 いいところ、見つかったね。

105 N-IR07 はい、本当に。

106 N-IR07 遊びに来て下さい。

107 N-JP02 〈笑〉【間】。

108 N-IR01 はーい、ありがとうございます。

109 N-IR07 いつも、ありがとうございます。

例2では、第三者のペルシア語母語話者がN-IR07の「誘い」や「感謝」の発話機能の表出が日本語規範に沿っていないことを留意したが、「これらが会話で見られことで、相手に対して感情を示している」、「会話の流れを聞いていて気持ちがいい」などの肯定的評価があった。ペルシア語の儀礼的な社会言語規範（タアーロフ）では、「相手の発話者を自分の領域に誘う」ま

たは「自分の感情を示す発話連鎖」が礼儀として見なされていることが、上記の第三者のコメントから理解される。L106、107では隣接ペアが未完成であったり笑いや間が見られ、また応答がある場合、それが非優先的な応答と考えられ、相手の発話者N-JP02によってなされている。しかし、N-IR07は感情提示や相手に興味を示すことで、より親密な人間関係を作ることを会話内において重視していると考えられる。

## (2) 否定的評価

ペルシア語母語話者のみに、否定的に評価された逸脱には、隣接ペア連鎖の「③日本人の応答が微妙に冷たい」が挙げられる。日本人による応答が冷たい、いわゆる期待している応答が日本語話者から返ってこないことが、相互行為で、失礼だと判断し、発話連鎖が継続しない理由として挙げられている。

(例3) 場面：近所での挨拶、参加者：日本語話者60代、ペルシア語話者40代（近所同士）

【逸脱の種類】：年上の日本人の名前にペルシア語尾の接尾辞を使用（対人関係から）

【評価】：否定的 【判断規範】：ペルシア語規範と日本語規範

- 1 N-IR07 ごめんくださーい、<JP01>ジャン。
- 2 N-IR07 あ〜こんにちは〜、おはようございます、私《笑》。
- 3 N-JP02 こんにちは。
- 4 N-IR01 おはようございます、どうも。
- 5 N-IR07 友達。

ここでは、会話開始部の挨拶で逸脱の留意が報告されている。相手の発話者であるN-JP02がN-IR07より年上であるにも関わらず、ペルシア語の「ジャン」という呼称表現をN-JP02の名前の語尾に付けていることが分かる。まず「ちゃん」の代わりに「ジャン」と誤ってペルシア語にコードスイッチングをしていることに加え、そもそも日本語の社会言語規範を基準としては、

自分より年上に「ちゃん」という呼称で名乗らないことが指摘されている。

136 E-JP02 うん〈はい〉 {<} , ,

137 E-IR03 〈じゃ、仕事〉 {} } 頑張ってください。

### 5.1.3. 逸脱3の評価

(1) 逸脱に対する同様の評価（両者が否定的あるいは肯定的に判断している）

138 E-JP02 う～うん、どうも、頑張りたいくないけど〈笑〉。

ここでは、話題関係「話題の前置きがなく命題に入る」、「会話の終了部でのあいさつ」、「第2成分で期待の応答がない」、「日本語規範の上下関係が留意されていない」が逸脱として留意されている。否定的に評価された理由としては、日本語の社会言語規範が評価の基準となっていたことが、コメントから明らかになっている。以下で一つの事例を見る。

139 E-IR03 〈笑〉。

140 E-JP02 はいはいはい。  
。

141 E-IR03 じゃ、失礼します。  
。

142 E-JP02 はい。

(例4) 場面：事務での終了部挨拶、参加者：大学スタッフ40代、ペルシア語話者20代

【逸脱の種類】：会話の終了部での挨拶（話題関係から）

【評価】：否定的 【判断規範】：ペルシア語規範と日本語規範

例4では、学生であるE-IR03が大学のスタッフのE-JP02に会話の終了部の挨拶をしている。この会話ですべての第三者に留意されたのは、L137の『〈じゃ、仕事〉 {} 頑張ってください』の箇所である。「なぜこのタイミングでいきなりこの話題を導入しているのか」、「いたわる者を目上にはいけない」などのコメントが両者から述べられ、否定的に評価された。

また、L138のE-IR03の発話に対してE-JP02が、笑いながら応答していることに関しては、「最後はちょっと笑いがあり不自然に思えた」などの評価も述べられている。ここでの笑いも非優先的な応答であると判断できる。このような日本語母語話者の応答は、ペルシア語母語話者が隣接ペアの第一成分で逸脱をしているからだと考えられる。

(2) 逸脱に対する異なる評価

ここでは、日本語話者には否定的に評価されているものの、一部ペルシア語話者には、肯定的に評価されている。ここで注目するのは、「文末の丁寧体動詞の省略」である。

(例5) 場面：フリーマーケットでの会話、

参加者：ブースを隣同士に持つ販売者（初対面での会話）

【逸脱の種類】：文末の丁寧体動詞の省略（対人関係から）

【評価】：日本語母語話者：否定的、ペルシア語母語話者：肯定

的

【判断規範】：日本語母語話者：日本語規範、ペルシア語母語話者：ペルシア語規範

32E-JP03            結構日本長いんですか？    ぺらぺらですね。

33E-IR02            私、10年。

34E-JP03            10年、え——は—。

35E-JP04            上手、上手。

36E-IR02            いいえ。

「＜日本語母語話者による評価＞」

日本語話者はマクロな視点からE-IR02の会話の全体の流れを評価している。「ペルシア語話者は話を盛り上げない」、「初対面であるのに、会話がなれなれしく感じられる。」、「会話に変な親しさ感がある。」と総合的に評価を述べている。

一方、ミクロな視点からの留意では、会話のいくつかの箇所に



において、L33のように文末に動詞が現れないことが挙げられた。初対面であるにもかかわらず、動詞の省略が関係性を馴れ馴れしく見せていることが否定的な評価として報告されていた。

「＜ペルシア語母語話者による評価＞」

しかしペルシア語話者は、この場面においては、発話者同士の間では、上下関係もなく、「文末の動詞省略が関係性をより親しくしている」とその逸脱を肯定的評価していた。同じく、「会話中に声を張る」も儀礼的なマーカ―として肯定的に評価されていた。

次節で以上の評価の内容を参照に、会話の参加者によって適用されている規範について考察していきたい。

## 5.2. 第三者の評価から想定されるペルシア語話者の規範適用

以下では、第三者の逸脱の留意の評価とそのコメントから、接触場面内でペルシア語話者によって適用されたと考えられる規範をまとめたものである。

### 5.2.1. 第一言語(ペルシア語)の規範

日本語母語話者が否定的な評価をしており、ペルシア語母語話者が肯定的な評価をしている逸脱では、ペルシア語からの転移(ターロフ)が現れていると考えられ、インターアクションに参加しているペルシア語母語話者は母語規範を適用したものと考えることができる。以下の逸脱がこのようなタイプの規範では確認された。

- ① 前置きがなく話題展開(相手の発話者を考慮した上での「健康尋ね」)
- ② 「感情提示」の現れ
- ③ 相手の発話者の「褒め」に対する「誘い」での応答
- ④ 会話終了の前置きでの挨拶
- ⑤ 声を張る(相手に対する礼儀を示すため)

相互行為において、この5つのタイプの逸脱の共通した特徴は、ペルシア語母語話者が相手の発話者をより気遣ったことで発話されるということである。なぜならば、会話全体の流れを通し

て、以上の5つの言語行動が省略されても、相互行為の会話内容には何の乱れも表れないからである。従って、日本語母語話者には、以上の言語行動は不要に見え、否定的に評価される。

### 5.2.2. 目標言語（日本語）の規範

儀礼的な発話行為としてみなせる言語行動が表れるが、第三者のいずれからも逸脱として報告されない場合には、目標言語である日本語の規範が適用されていると考えられる。その場合、逸脱があったとしても、逸脱は留意されないか、留意されても評価されず、報告には至らなかったと考えることができる。以下の二つの発話行為においてペルシア語母語話者は、目標言語規範が適用されていたと考える。

- ① 「感謝」の発話機能、
- ② 開始部と終了部の「挨拶」

「感謝」や「挨拶」を適用する箇所がペルシア語の母語規範に近いこともまた、ペルシア語母語話者が目標言語である、日本語母語規範を上手く習得できているひとつの理由であると考えられる。そこには、正の転移)

positive language transfer) が起きている。

### 5.2.3. 中間社会言語規範

ペルシア語、日本語の両言語の規範からの逸脱として否定的に評価されたものである。そもそもペルシア語話者は、母語の社会文化的な影響から、発話場面に対して高い儀礼的意識を持っている。従って、相互行為では、儀礼的な発話を開始するが、日本の社会言語規範に対する不十分な理解から、日本語話者の応答に対してペルシア語規範と日本語規範の両言語から少し離れた言語行動をしてしまう。こういった場合には、負の転移 (negative language transfer) が起きていることが分かる。

こうした逸脱は、中間的な社会言語規範にもとづくものと考えられ、以下の6つのタイプが観察された。

- ① 不適切な応答、② 相手との上下関係・社会関係への留意、
- ③ 文末動詞の省略、④ 必要以上の笑い、⑤ 相手への率直な質問
- ⑥ 相手の名前を呼ぶ、呼称など

以上の逸脱のタイプは、接触場面の会話の中で複数回もペルシア語母語話者からさまざまな場面で確認された。このような逸脱が会話で起きてしまう場合は、礼儀差が高まるどころか日儀礼的な会話として認識される。相手の発話者との距離間の認識に問題があることから現れたものであると考えられる。特に初対面場面において、中間社会言語規範が多く見られた。日本語規範では、上司や初対面である相手に対し、より丁寧な言葉遣いや距離間の調整が期待される。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、日本在住のペルシア語母語話者が儀礼的な会話場面において、日本語母語話者とのように言語行動を調整しているのかを言語管理の視点を取り入れ考察した。そして、ペルシア語話者が重視する儀礼的場面での規範に注目し記述した。

分析の結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 第三者による逸脱のレベルとタイプでは、逸脱1と逸脱3のタイプが最も多く見られた。

逸脱の3では、ペルシア語母語話者と日本語母語話者が共に同じ箇所を報告している。しかし、第三者が逸脱を留意した理由、すなわち逸脱の基準となると考えた規範が異なっていたことが明らかとなった。フィールド調査から明らかになったのは、逸脱3では接触場面において日本語にもペルシア語にも存在しない言語行動が起きていることが指摘できる。

- (2) 日本人の第三者によるペルシア語話者の逸脱の評価はすべて否定的であった。そうした逸脱が多く留意された場面の録音データでは、ペルシア語母語話者から誤った質問や応答が特に多く見られた。期待の応答でない発話が見られた箇所に関しては、笑いや間が多く表れ、そこからの2~3ターンでは会話の乱れが見られる。
- (3) 儀礼的な言語行動に見られた発話機能のうち、「褒め」「誘い」「願望」「警告」ではターオフの影響が現れている一方で、「挨拶」や「感謝」では日本語の規範に近い行動が見られた。母語規範の影響は発話機能によって異なることが示唆された。

今後の課題として、より多くの発話場面を考察することで新たな視点を導入していきたい。実際にどのようにすればより適切に誤りなく会話を継続させることができるのか、そこを考察した上でより快適な会話を成り立たせることを期待する。本研究においては、第三者の評価を基準として考察をしたが、今後は会話参加者からもより詳細にインタビューを行いそれを分析の結果に反映し新たな気づきを求める。そして最後に、以上の調査結果を踏まえ今後のペルシア語母語話者の日本語教育に生かすことを最終目的としたい。

#### 参考文献

- Alavi, F. & Zinali, S. (2014). A Study of Cultural Oppositions in the French Translation of the Ta'aroff. *Journal of language Research*, No.11. Alzahra University.
- Beeman, W. O. (1986). *Language Status and Power in Iran*. Bloomington: Indiana University Press.
- Bikaran, M. & Azadarmaki, T. (2010). taarof dar zist-e rouzmarreh-ye Irani (イラン人日常生活におけるタアーロフ). *barg-e farhang, Cultural Studies Quarterly*, 第22号. University of Tehran.
- Dahmardeh, M. & Parsazadeh, A. & Rezaie, S. (2016). *Culture Matters: the Question of Metaphor and Taarof in*

*Translation, Cultura*, 13(1). Peter Lang Academic Publishing Group.

Fan, S. K. (1999). Language problems in Japanese conversation between non-native speakers. *Social*

*linguistics science*, 2, pp.37-48 「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』2号、

37-48頁.

Fan, S.K.C. (2002). Investigate the reflection of the target person (1) Follow-up interview.

Neustupný, J.V. & Miyazaki, S. (ed.), *Methods for language studies*. Kuroshio Press, pp.88-95 「対象者の内

省を調査する (1) フォローアップ・インタビュー」、J.V.ネウストプニー・宮崎里詞 (編)

『言語研究のための方法』くろしお出版。 88-95頁.

Goffman, E. (1986). *Interaction Ritual*. Housei daigaku press. (広瀬英彦・安江孝司訳) (1986) 『儀礼と

しての相互行為』法政大学出版会.

Hymes, D. (1972). Models of the interaction of language and social life. In J. Gumperz & D. Hymes

(Eds.), *Directions in Sociolinguistics* (pp.35-71). New York: Holt, Rinehart and Winston.

Katou, T. (2006). Social language norms of style and topics in contact situations. *Bulletin of*

*International Student Education Center, Tokai University* 26, pp. 1-17. 「接触場面における文体・

話題の社会言語規範』『東海大学  
留学生教育センター紀要』26号、1-17頁.

Koh, M. (2006). A Study on Norm of Grammar  
Ability- Focusing on Passive Generation of  
Contact

Scenes. Language management in a  
multicultural society-Language management  
research of

contact situation Vol.4. Report of Research  
Project, Graduate School of Humanities and  
Social

Sciences, Chiba University129, pp.91-102.  
「文法能力の規範についての一考察—接  
触場面の受

身の生成を中心に—」『多文化共  
生社会における言語管理—接触場面の言  
語管理研究vol.4』

千葉大学大学院人文社会科学研究  
科研究プロジェクト報告書第129集、91-  
102頁.

Malinowski, B. (1922). Argonauts of the  
western pacific. New York: Dutton.

Mirza-suzani, S. (2006). Cross-cultural  
Problems of Translation of Compliments [in  
Persian].

Translation Studies Quarterly, 4(13). Tehran

Mirza-suzani, S. (2018). Tahli-e konesh goftar-  
e taarofat dar Farsi, Engilisi va Faranse az

manzar-e ejtemaee farhangi (社会及び文化  
の観点から分析したペルシア語・英語・  
仏語におけるタアロー  
フの言語行動). Motealeaat-e zaban va  
tarjomeh. Ferdowsi University of

Mashhad.

Miyazaki, S. & Mariot, H. (ed.). (2003).

Contact situation and Japanese education –  
Impact of Neustny.

Mijishoimn Press. 『接触場面と日本語教  
育—ネウストプニーのインパクト—』明  
治書院.

Muraoka, H. (2006). Types of problems in  
contact situations. Language management in a  
multicultural

society-Language management research of  
contact scenes4. Report of Research Project,  
Graduate

School of Humanities and Social Sciences,  
Chiba University129, pp.103-113.

Neustupný, J.V. (1982). Communication with  
foreigners. Iwanami Press. 『外国人とのコ  
ミュニケーション』岩

波書店.

Neustupný, J.V. (1985a). Language norms in  
Australian-Japanese contact situations. In  
Clyne, M. (ed.), Australia, meeting place  
of languages (pp.161-170), Pacific  
Linguistics.

Neustupný, J.V. (1985b). Problems in  
Australian-Japanese contact situations. In  
Pride, J. B. (ed.), Cross-cultural

encounters: communication and  
miscommunication (pp. 44-84), Melbourne:  
River Seine.

Neustupný, J.V. (1995). Japanese education  
and Language management. Ousaka Nihonn  
Kenkyu7, pp.57-82 「日 本語教育  
と言語管理」『大阪日本語研究』7号、  
67-82頁.

Neustupný, J.V. (1997b). Language Planning  
for Australia. Language sciences45. pp. 28-  
31.

Neustupný, J.V. (2004a). Gengo kanri riron no

rekishiteki ichi: appudeito [The historical position of language

management theory: An update]. (= Language Management in Contact Situations, 3, Report on the Research

Projects, 104, pp.1-7). Chiba: Graduate School of Humanities and Social Sciences, Chiba University.

Radcliffe, A.R. (1922). The Andaman Islanders, Cambridge, the University Press.

Sacks, H. & Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for

conversation. Language 50, pp.696-735.

Salmani-Nadoushan, M. (2005). A comparative Sociolinguistic Study of Ostensible Invitation in

English and Persian. Research in Contemporary World Literature, 9(20). Faculty of Foreign

Languages and Literature of University of Tehran.

Satou, F. (1992). Field work. Shinyousha Press. 『フィールドワーク』新曜社.

Sahragard, R. (2002). A cultural Script Analysis of Politeness feature in Persian pp.399-423.

Sharifi Moghaddam, A. & Bahreyni, M. & Abolhasanzadeh, V. (2017). An Experimental Study

on the Effect of Age and Gender on the Use of Compliments in Persian [in Persian]. Journal of

Sociolinguistics, 1(2). Payame Noor University.

Tajabadi, F. & Aghagolzadeh, F. (2011). F.

FLT in the Light of Culture teaching

Challenges [in Persian]. Foreign Languages Research. Vol.1, No.1. Faculty of Foreign

Languages and Literature of University of Tehran.

Tambiah, S. (1985). Culture, Thought, and Social Action: An Anthropological Perspective. Cambridge: Harvard

University Press.

Usami, M. (2019). Basic Transcription System for Japanese: BTSJ (2007 Revised edition).

Basic research for organic integration of discourse research and Japanese language education and trial

production of multimedia teaching materials 2003-2008. 「改訂版：基本的な文字化の原則（

Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年改訂版」『談話研究と日本語教育の

有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア

教材の試作』平成15-18年

度.

Zoren, F. (2016). Courtesy and compliments in Iran [in Persian]. Iranian Studies, 6(1).

University of Tehran.

